

研究ノート

大島正満の随筆をめぐって

——「新島八重」補遺——

吉 海 直 人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

A Study on “Oshima Masamitsu’s Essey”

Naoto Yoshikai

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation, Doshisha
Women’s College of Liberal Arts, Professor

【要旨】 新島夫妻との思い出を綴った大島正満の随筆が存する。それは第二次世界大戦直後に小学校国語教科書にも掲載されていたが、これまできちんと調査されてこなかった。そこで今回調査したところ、六種のエッセイが存在することが明らかになった。

【キーワード】 みつ坊・大島正満・新島襄

一、新島夫妻とみつ坊

NHK大河ドラマ「八重の桜」に触発されて、新島八重の伝記を執筆しているうちに、明治20年の夏、新島夫妻が北海道で保養していることを知った。⁽¹⁾ その折、幼馴染であった日向ユキ（元会津藩士の娘）と札幌で二十年ぶりにめぐりあっていたという事実もわかった。しかもその縁で、ユキの長男である内藤一雄が同志社英学校に入学していたことまで判明した。

それとは別に、大島正満という人物の存在が大きいことが浮上した。正満の名前は、大島正健著・大島正満補訂『クラーク先生とその弟子達』（新教出版社・昭和24年）という本で見覚えがあった。しかしながら従来の新島研究では、大島正健と襄の交流が主体であり、当時三歳であった正満のことなど問題にされるはずもなかった。

ところが新島夫妻は、北海道静養中に正満を我が子のようにかわいがっていたのである。そのため正満こと「みつ坊」に随分振り回されていたようだが、それこそが二人にとって至福の時だったと思われるのではない。

話はそれだけでは済まなかった。成長した正満が、自らのエッセイに新島夫妻との思い出を書いていたからである。それは新島研究のみならず、八重研究にも大いに役立つ資料と思われる。そのことは拙著『新島八重愛と闘いの生涯』（角川選書）でも触れているが、その後大河ドラマ効果で新たな資料が見つかったので、あらためてまとめ

てみることにした。

二、大島正満の随筆

正満は成人して一流の生物学者になっている。父正健は一時期同志社に教員として勤めているが、正満が同志社の生徒・教員だったことはない。そのため「新島の小父さん」という随筆を書き残しているにもかかわらず、同志社女子大学の図書館にはその本すら所蔵されていなかった。

その正満が初めて日の目を見たのは、「新島研究63」（昭和58年1月）誌上であった。そこに北垣宗治先生が「新島のおじさんと満坊」を掲載されているからである。これは正満が昭和28年1月23日に開催された「新島先生を偲ぶ記念会」で講演した原稿である。そのコピーを正満の八男である大島智夫氏が北垣先生に託されたことから、講演の三十年後に「新島研究」に載せられたという次第である。

それとは別に、私は偶然『不定芽』（昭和9年）という本を入手した。これは大島正満の随筆集であるが、生物学者らしい書名になっている。そのため気に留める人もいなかったようだが、なんとその本の最初に「新島の小父さん」という随筆が掲載されていたのである。そこであらためて正満のことを調べているうちに、北垣先生の御論にたどりついた。さらに詳しく調べてみると、北垣先生は「大島正健・正満父子と新島襄」（同志社アメリカ研究別冊6・昭和57年）という論文も書かれていることを知った。

そこで北垣先生の書かれたものを参照させていただいたところ、『不定芽』所収の「新島の小父さん」については言及されていないことがわかった。ただしそこに看過できない一文を発見した。それは、

このカーネギー博物館での出会いの感動的な物語は、第二次大戦直後の小学校の国語読本に載ったことがあり、私はそれを誰かか

ら借りて読んだ記憶がある。当時同志社大学の学生であったので、一種の感動を覚えたことを思い出すのである。

（『新島襄とアーモスト大学』373頁）

である。私は単純に講演原稿の元本として、『不定芽』所収の「新島の小父さん」の存在を考えていたのだが、どうやらその中間に「小学校の国語読本」が存在することが示唆されていたのである。そこでさらに興味を抱いて、その教科書の現物を探してみることにした。

三、教科書に載った新島夫妻

新島夫妻は、北海道滞在中にみつ坊に振り回されと書いたが、私も正満氏にはかなり振り回されることになった。

まず教科書の調査で浮上したのは、第二次世界大戦敗戦後の暫定教科書である。終戦直後は有名な墨塗り教科書が使われたようだが、その後に使用されたのが暫定教科書である。幸い中村紀久二監修『文部省著作暫定教科書（国民学校用）』（大空社）が覆刻されており、同志社女子大学の図書館にも所蔵されていたので、早速手に取って調べてみた。すると昭和21年度小学校六年後期用国民学校暫定教科書第三巻『初等科国語八』（昭和59年5月復刻発行）に、「めぐりあひ」というタイトルで正満のエッセイが出ていたのである。ここまでは極めて順調というか幸運だった。

これが北垣先生の読まれた「国語読本」に違いないと思った反面、わずか一年だけの暫定教科書に特定しても大丈夫だろうか、という不安も脳裏をかすめた。そこで用心のために昭和22年度以降の教科書にも当たってみることにした。雲を掴むような話だが、ここでも運よく第6期国定国語教科書『国語第六学年下』（昭和22年・24年）に、「情熱のことば」と改題された「めぐりあひ」が収録されていることがわかった。

というのも、たまたまインターネットで「新島八重」と「国語教科書」をキーワードに検索をかけてみたところ、玉川大学教育図書館の記事がヒットしたからである。それは玉川大学教育博物館所蔵の資料を紹介するものだったが、そこに新島八重のことが書かれている教科書として、前述の暫定教科書ではなく「第6期国定国語教科書『国語第六学年下』『情熱のことば』」が図版付きであげられていたのである。

「八重の桜」放映によって新島八重が全国的に話題になったことで、この記事も書かれたのであろう。改めて大河ドラマの影響力のすごさを感じ知った。そこで教科書の現物を入手すべくインターネットで検索してみると、安価で販売している福島の古書店がヒットした。早速注文したところ、すぐに該当の本が送られてきた（しかも複数）。なるほど目次には「めぐりあい」とあったが、暫定教科書とは体裁がかなり違っていた。そこには「赤絵のはち」と「情熱のことば」という二つの話が併記されており、「めぐりあい」というタイトルの話はなかったからである。恐る恐る本文を見たところ、「情熱のことば」の方が「めぐりあい」と同じ内容だった。タイトルの変更は、敗戦後という日本の社会状況の中で、むしろアメリカ人のホランド博士に焦点（主題）があてられた結果のようである。

こうして『不定芽』と講演原稿の間が、新島八重の導きによって埋まっていた。当初は一冊の教科書と想定していたのだが、ここで「めぐりあい」と「情熱のことば」の二種類が見つかったわけである。これでもう完璧と思う反面、まだほかにも違うタイトルでどこかに掲載されているのではないかと不安が生じた。そこで思いついて正満の他の随筆集を調べてみることにした。検索で最初にひっかったのは、『魚籠』（昭和16年）というまでも生物学者らしいタイトルの本である。そんなに高価ではなかったので、取りあえず中身も見ずに注文してみることにした。

古書店から送られてきた本の目次を開いてみると、そこに「めぐり

あひ」も「情熱のことば」も掲載されていなかった。今回ははずれかと思いきや、そのかわり「緋文字」という奇妙なタイトルで、やはり類話が掲載されていることを発見した。『不定芽』といい『魚籠』といい、このタイトルから新島夫妻の話へたどりつくのは容易ではあるまい。運が良かったというのか、あるいは八重の導きなのかもしれない。

四、赤インキの謎

さて『魚籠』所収の「緋文字」という題名は、晩年の裏が眼を悪くして赤インキでなければ見えない（書けない）という八重の話に焦点があてられていることによる。そのかわりここでは、ホランド博士との運命的なめぐりあいの一件はすべて削除されていた。

それは出版されたのが、太平洋戦争に突入した昭和16年という時代背景を考慮してのことだろう。しかも後半には、赤インキで書かれているという大島正健宛ての裏の書簡（明治20年12月6日）が付されていた。まさかこんなところに新島裏の書簡が紹介されているとは夢にも思わなかった。そしてその書簡の最後は、「近來満ボウ先生は如何。毎々話し申居候」であった。

実は赤インキのことは先の「めぐりあい」にも、

そこに赤インキが置いてあるでせう。をぢさんは晩年眼が悪くなつてね。手紙でも何でも、赤インキで書かなくては見えないやうにおなりになつたのですよ。

と記されていた。ただしこのことは最初の『不定芽』では一切触れられていないので、後の創作かと思っていたのだが、『魚籠』を見てそこからの引用であることが明らかになった。「緋文字」には、

そこに赤インキが置いてあるでせう、叔父様は晩年眼が悪くなつてネ、手紙でも何でも赤インキでお書きになつた。

とあるので、赤インキに関してはここから「めぐりあひ」に引用されていると見て間違いあるまい。ついでに「情熱のことば」からも同じ箇所を引用しておこう。

そこに赤インキが置いてあるでしょう。おじさんは、年とられてから目がわるくなつてね、手紙でもなんでも赤インキで書かなくては見えないようになつたのですよ。

こちらの方が「緋文字」にやや近いようである。なお「緋文字」では、さらに裏の墓参り記事に引き続いて、

新島の小父さんがあのデスクによつて、あの赤インキで認めたのであらう明治廿年十二月六日附で、札幌農学校に教鞭をとりながら札幌独立教会を牧してゐた私の父に送られた緋文字の長書が我家に秘められている。

と説明があり、以下長々とその手紙の全文が紹介されている。それが『不定芽』との最大の相違点であり、だからこそ「緋文字」という象徴的なタイトルに変更されているのであらう。

五、一過性の赤インキ

ところで裏が晩年眼を悪くしたため、赤インクで手紙を書いていたということは、従来の新島研究ではほとんど話題になつていなかったようである。これも不思議な話である。試みに『新島襄全集3、4』で書簡を調べてみたところ、

明治20年10月8日の中村栄助宛（毛筆赤インク）

明治21年1月22日同志社五年生宛（毛筆赤インク）

明治21年11月22日徳富猪一郎宛（毛筆赤インク）

明治21年11月下旬松平正直宛（毛筆赤インク）

明治21年12月1日諸教会牧師・代議員宛（毛筆赤インク）

明治21年12月2日大島正健宛（毛筆赤インク）

明治21年12月5日徳富猪一郎宛（赤インク）

などの例を拾うことができた。これらの書簡は、赤インキで文章の一部を修正したなどといったレベルのものではなさそうだ。少なくともこれらによつて、確実に裏が赤インクで手紙を書いていることが確認できた。ただし不思議なことに、それ以降はまた普通の墨（黒インク）に戻っているようである。明治21年前後だけ裏の眼が悪くなり、それ以降治つたというのも何だか奇妙な話である。まして八重が嘘をついているわけでもあるまい。

その時はつと思ひ当たることがあつた。それは「八重は警察官」というエピソードである。ひよつとするとこの時期というのは、裏の心臓の病気が悪化するのを恐れた八重が、手紙を書かせないように裏を監視していた時期と重なるのではないだろうか。もしそうなら、裏は八重の目を盗んで手紙を書かざるをえなかった。そのため普通に墨や黒インクを使用することができず、やむをえず赤インキで手紙を書いたのではないだろうか。それ以降は八重も諦めて見張るのをやめたので、もとの墨に戻つたというわけである。

果たして裏は本当に眼が悪くて赤インクを使用したのだろうか、それとも八重の目を盗んで手紙を書いたために、赤インクを使用せざるをえなかったのだろうか。この点についてはもう少し慎重に検討すべきであらう。新島研究者の御意見も伺いたいところである。

六、六つ目のバリエーション

こうして正満のエッセイは、「新島の小父さん」から「緋文字」になり、それが教科書では「めぐりあひ」という表題になり、さらに「情熱のことば」へとタイトルを変更していたことがわかった（内容も微妙に変容している）。そして最後の講演は既に日本が独立した後であり、しかも新島襄の命日に行われた記念講演なので、それに合わせて「新島のおじさんと満坊」に戻っているのであろう。そういったタイトル及び内容の変更は、自ずから当時の日本の社会状況とも深く結びついていったようなので、その比較も面白い課題である。

これで正満のエッセイは、最低でも五つのバリエーションが存することが判明した。もちろんまだ知られていない別のバージョンが存する（潜んでいる）可能性もある。今のところ昭和24年までの教科書しか確認していないが、GHQによる進駐は昭和27年まで続いているので、もう少し先まで教科書に掲載されていた可能性があるからだ。

そこで念のため「大島正満」「満坊」というキーワードで検索してみたところ、またしても東書文庫の蔵書検索にヒットした。三省堂出版が昭和25年に発行している「中学新国語1下」の中に、大島正満著「満ぼう」が掲載されているというのである。

残念ながら古書目録で現物を探せなかったため、出版元の三省堂に尋ねるのが手っ取り早いと思い、問い合わせしてみたところ、現物を所蔵しているとのことであった。早速ご好意により内容を確認してみたところ、予想通り新島夫妻との思い出話だった。小学校の教科書に掲載されていたエッセイが、後に中学校の教科書にも掲載されていたのである。これでまた一つ教科書の記事が見つかった（ただし何年間掲載されていたのか未詳）。

これには本文の末尾に「大島正満『魚籠』の「緋文字」による」と出典が明記されていたので確認したところ、「緋文字」から手紙の部

分を除いてそのまま引用されていることがわかった。

こうして奇跡的に六つ目のバリエーションにたどりつくことができたわけだが、おそらくこれで終わりではあるまい。もう少し満坊と関わってみることにしたい。

「新島の小父さん」の六つのバリエーション

- ① 大島正満「新島の小父さん」『不定芽』（刀江書院）昭和9年7月
- ② 大島正満「緋文字」「魚籠」（実業之日本社）昭和16年4月。なお山本美穂子氏「目録大島正健・大島正満・大島智夫関係資料」北海道大学文書館年報10・平成27年3月によれば、「緋文字」の自筆原稿が所蔵されているとのことである。また大島正満著『新島襄の面影』（伝記）の原稿も所蔵されている。
- ③ 大島正満「めぐりあひ」昭和21年度小学校六年後期用国民学校暫定教科書「初等科国語八」（一年限り）
- ④ 大島正満「情熱のことば」昭和22年度第6期国定国語教科書「国語第六学年下」（昭和22年から24年まで掲載）
- ⑤ 大島正満「満ぼう」昭和26年度「中学新国語1下」三省堂出版（昭和26年～28年）
- ⑥ 大島正満講演原稿「新島のおじさんと満坊」昭和28年1月23日（新島研究63）昭和58年1月所収）

〔注〕

- ① 吉海直人「新島八重愛と闘いの生涯」（角川選書）平成24年4月
- ② 大島正満の生没年は1884年（明治17年）6月21日～1965年（昭和40年）6月26日であるから、明治20年は満三歳ということになる。ただし⑤「満ぼう」では「四歳」となっている。それは『魚籠』所収の②「緋文字」がそうになっているからである。
- ③ 両教科書には大きな違いが認められる。まず③暫定教科書は本文が二段落みであるが、新しい教科書④は一段組みと書式が大きく異なっ

いる。しかもタイトルのみならず、文体もかなり改訂されている。このわずか一年の間に、旧仮名遣いが現代仮名遣いに移行しているのが目を引いた。また「情熱のことば」には、暫定教科書にはなかったかわいらしい挿絵が2図挿入されている。この挿絵の有無によって両者は簡単に判別できるわけである。

(4)
コラム3「八重は警察官」(注1選書所収)。

〔追記〕もし北垣先生の御論稿がなかったら、そして大河ドラマ「八

重の桜」が放映されなかったら、これほど熱心に正満について調べることはなかったであろう。あらためて北垣先生の学恩に感謝申し上げたい。また閲覧を許可して下さった三省堂出版にもお礼申し上げます。